

# 創建

そうこん

2020・11・20 VOL.55 NO.2 (通巻175号)

巻頭言：濱田幸雄・1

ネットワークOB&OG②：池田拓司・2

第24回JIA東北建築学生賞応募作品・3

研究発表／教室ニュース・4

■日本大学・工学部・建築学教室■

つい先日、自分が学生時代どうしても行きたくていけなかったコンサートをBS放送でみる事ができました。タイトルは「伝説のコンサート“山口百恵 1980.10.5 日本武道館”」です。放送日は10月5日の午後8時から。引退コンサートから40年後の同じ日を選んで放送されたこととなります。私達の年代にとって、彼女の名前はいろいろな記憶を呼び起こすトリガーの役割を持ち続けています。まさにターゲットは私ではないか。これは見なければという思いで見始めたのですが、歌の感動とは別の思いがどんどん強くなっていくのをどうすることもできなくなってしまいました。それはオープニングから22曲目の「一恵」で頂点に達しました。この歌は、彼女自身が横須賀恵という名前で作詞をしています。この歌を紹介した時の彼女の言葉と、歌を聞いたときの印象、あふれ出るほどの思いを冷静な言葉を用いて説明していた彼女の強い心の在り様に、40年の時を経て初めて気づきました。このとき、彼女はまだ21歳です。歌詞の一文にある「彼は、夢だと、人は言う」とは、大切な異性のことでしょう。「母にもらった名前通りの多すぎる程の幸せはやはりどこか寂しくて」と彼女は歌います。ここで彼女は初めて『はは』ということばを口にします。この後から歌のリズム、音程が微妙に揺れ始めます。この一言が、どれほど彼女にとって重いのか、またこの一言を口にするために、どれほど彼女が緊張していたのかを感じ、一層歌に引き込まれてしまいました。一曲おいた次の曲が「秋桜」なので、その前振りではないかと思うひが多いかもしれません。私は、人は時に全身全霊を傾け、たった一言を口にするものだと思います。そうして思わぬ展開を招き、失ったものもあれば、得たものも多くあったように感じるから。まさに言葉の重みでしょう。

◆  
新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、世界中がホームワークを余儀なくされています。当然、連絡の手段は電話かメールということが多くなります。特にメールで自分の状況を報告するとき、頼み事をするとき、あるいは謝罪の気持ちを伝えようとする、多くの人が悩むのではないかと想像します。親しい友人同士であれば、絵文字ひとつで「了解」「頑張って」の気持ちを伝えることができますが、まさか目上の人や教師に絵文字を送る人はいないでしょう。

◆  
言葉だけでなく、文章やメールによるコミュニケーションが今まで以上に増えることが確実視される中、

## コロナ禍で知る言葉と文字の重さ

教授 濱田幸雄

私たちはどうすればよいのか、ここでよく考える必要があると思います。実際、学生の皆さんからのメールが以前にも増して多く届いています。中には差出人が誰なのか、どの授業を欠席したことを話題にしているのか、まったく分からないものが結構な数あるのが現状です。そのようなメールを受け取った教員は、カタカナで記された苗字などわずかな情報を基に、学生番号や氏名を検索し、履修名簿を開いて科目名を確認する作業を行わざるを得ません。ちょっと落ち着いて考えれば、学生番号も氏名も送っていないことに気づくはずでしょう。余裕がないのでしょう。結果的に相手の立場に立てていないのです。会話と異なり、文字は残るということも忘れてはいけな

しょう。返信のために以前のメールを読み直して、不快な思いを追体験するようなことになりかねません。

◆  
せっかく何度も読み返してもらえるメールを送るのであれば、より円滑な人間関係を構築するツールとなるようにスキルを磨くことを考えるべきです。日本語の文章は漢字、ひらがな、カタカナの3種類の文字を使います。漢字とひらがなを適度に織り交ぜた文章は、堅苦しさを感ぜず、親しみ感すら与えてくれます。また、日本の漢字はとても情報量が多いという特徴を持っています。漢字研究者の笹原宏之教授によれば、「思」と「想」という2つの漢字ですが、発音は同じで意味もほとんど同じように私たちは使っていますが、違いがあると言います。「想」は会えない家族や恋人について、懐かしさや愛しさと共に思い起こす時など、特定の状況でよく使われるとのこと。また、日本語は色を表現する漢字の数が多いことも特徴です。「赤」は火の光を浴びる人の様子を表した象形文字、「紅」はくれない、べにいろ、鮮やかな赤色を表します。だから真っ赤に燃えた太陽であり、曼珠沙華は真紅な花でなければならぬのです。語彙力も重要です。感動を表現するにしても、「感動した」ではなく、「心打たれました」「胸に響きました」「感銘を受けました」など素敵な言葉が沢山あります。

◆  
話言葉や文字の使い方は、時代と共に大きく変化します。しかしながら、人々が自分を豊かに表現して、周囲の人と良い関係を築くことができるための大切な道具であることは、いつの時代でも同じだと思います。語り掛ける相手が目の前に居なくても、丁寧に相手とのコミュニケーションをとる心がけることが何より重要だと思います。

## ネットワークOB&amp;OG②③

## 機会を活かして

山口県立宇部工業高等学校  
校長 池田 拓司



このたび永田進先生（建築22回）からお話があり、「創建」に寄稿させていただくことになりました。

私は昭和55年4月に工学部建築学科に入学しました。

山口県立下関中央工業高校建築科3年のとき、進路先として国家公務員初級試験（建築職）に2次合格していましたが、恩師から「大学へ行ってみないか」と声を掛けられたのが、入学の機会となりました。

下関市から郡山市へ1000kmを超える移動となり多少の不安があったので、初年度は俊英学寮に入寮し2年からは賄いつきの下宿で生活しました。

入学後驚いたのは、全国各地から学生が集まっていることで、寮で同室の鹿児島県出身K君の方言、実物の雪を見たことがないと言っていた沖縄県出身のI君などが印象的でした。

授業は大変で、工業高校卒の私は数学と英語で苦労しましたが、何とか単位を修得し進級しました。

4年の卒業研究でお世話になったのが、建築防災工学研究室の塚本孝一先生でした。テーマは「火災時の爆燃現象に関する研究」で、主に開口部の形状や高さの違いによる現象発生時の特性を調べるものでした。

ある日、大学院博士後期課程に在籍しておられたH氏から「大学院に入ってみない」と声をかけられました。私自身予想もしない展開でしたが、学部卒業後博士前期課程に入学しました。

大学院でお世話になったのは、人間工学の大内一雄先生です。修士論文のテーマは、「動作域設定のための人体寸法に関する研究」で、静的人体寸法にどのようなものを付加させ動的人体寸法とし、さらに適切な動作域の設定につながるかを検討するものでした。当時研究室には17～18名の卒研生が在籍しており、後輩とのつながりができたことも大きな財産となりました。

現教授の浅里和茂先生と千葉正裕先生が1学年先輩で、前

工学部長の出村克宣先生が助手であったと記憶しています。

大学院修了後、東京の設計事務所に就職しました。

いわゆるバブルの時代であり建築ラッシュであったので大変忙しかったのですが、所員の多くが工学部建築学科の卒業生であったのが心強かったです。

3年後下関市に帰郷し、建設会社に勤務しました。

念願の1級建築士と1級建築施工管理技士の資格を取得しましたが、平成3年度の山口県教員採用試験を受験し、平成4年4月から教員生活をスタートすることになりました。これは高校の恩師から「K先生が定年退職されるので、建築の授業を担当する教員採用がある。受けてみないか。」と勧められたからです。

平成26年4月教頭に昇任し、平成29年4月に山口県立下関工科高校校長に採用され、令和2年4月から現任校に勤務しています。

前任校である下関工科高校は、母校である県立下関中央工業高校と県立下関工業高校が再編統合され、平成28年4月に開校した新しい学校です。その背景に少子化の影響があったことは否めませんが、高校での工業教育は大学とともに、未来の産業界を担う人材を育成する学びの場として、今後も必要とされています。同時に、工業教育を担当する有能な教員も必要です。

卒業生の多くが民間企業や官公庁に就職されていますが、日大OBの教員として生徒を育成するという選択肢も加えていただくことを期待しています。

本稿のタイトルとした『機会を活かして』とは、工学部建築学科で学ぶ機会を活かして、将来へつなげる知識や技術、社会人基礎力等を身に付け、多くの人とのつながりを築いてほしいとの思いを含んでいます。

終わりに、在学生の御活躍と母校の御発展を祈念するとともに、お世話になった先生方に感謝申し上げ筆を置かせていただきます。



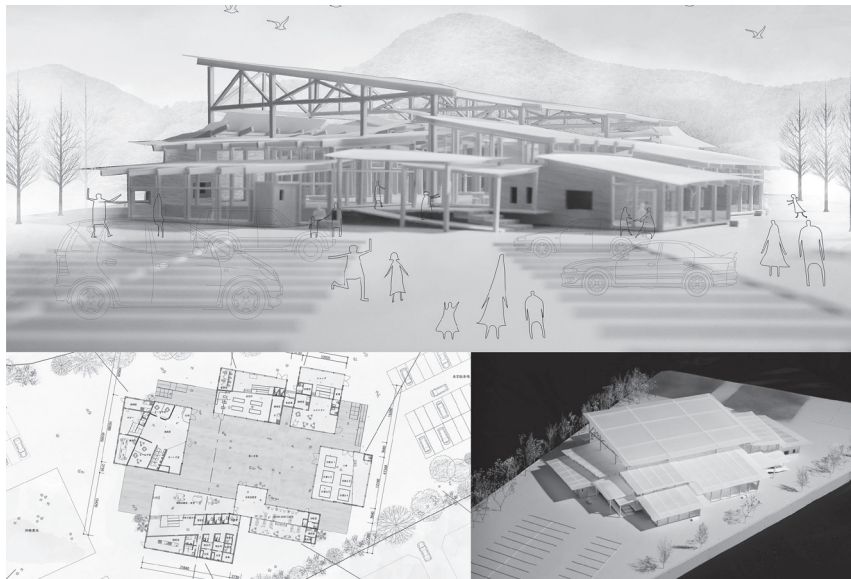
卒業研究報告会で発表者は私です。  
場所は54号館中講堂だったと思います。



爆燃現象発生時の様子です。



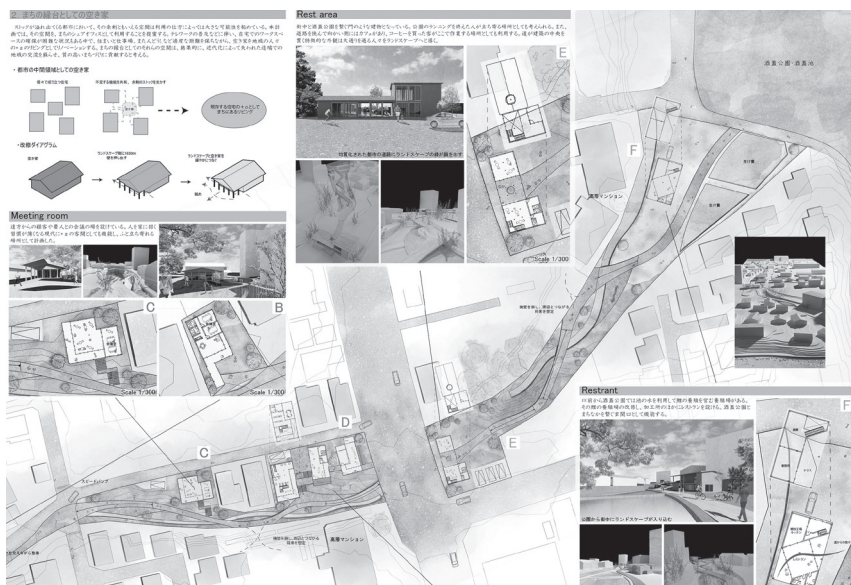
# 第24回 JIA 東北建築学生賞応募作品



## 紡ぐ学び舎

4年 川上 陸

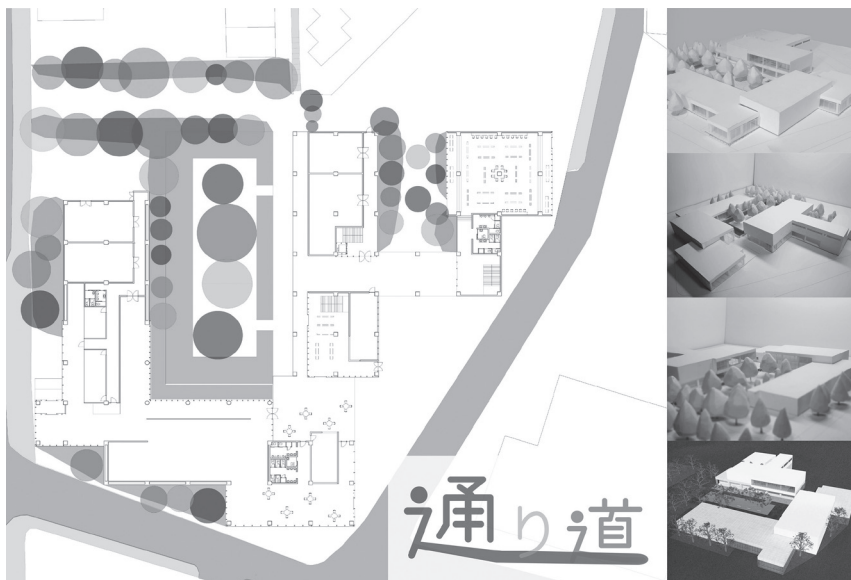
地域における物産に着目し、地域住民も含めてそれに関わる接点を増やすことで、地域の姿を新鮮に見せる建築を設計することを試みる。多くの地域にとっては、個々に質の高い「物」を生産や加工をしていたとしても、日常に近すぎるためあまり注目されず、地域の起爆剤には程遠い存在である場合も多い。6次産業化の中に、地域のあらゆる世代の交流と地域外の人を受け入れやすいプラットフォームをつくり、地域内外同時に関心を高める仕掛けが必要となる。生産・商業のみならず地域の教育・福祉も巻き込んだ、ボーダレスな建築群をつくり、伝統工芸や特産物と様々な立場の人との関わりを可視化することで、地域内からの関心を高めると同時に外部を巻き込み、それらの需要や知名度の回復に期待する。



## まちの縁台に腰かけて

4年 和久井 亘

2020年後の建築・都市を考える上で、人口減少や空き家などといった問題を、積極的に利用することで、地方都市の様相を変えて見たい。[まちの縁台としての空き家：空き家を、まちのシェアオフィスとして利用することを提案する。住まいと仕事場、また人どうしなど適度な距離を保ちながら、空き家を地域の人々の+αのリビングとしてリノベーションする。] [公園と一体となる空き家・ランドスケープ：公園を点として捉えるのではなく線あるいは面的に捉え、公園と公園を繋ぐことを意識し、その間にある空き家を公園と一体となったランドスケープとして整備する。] まちの縁台としてのそれらの空間は、結果的に、近代化によって失われた道端での地域の交流を蘇らせ、質の高いまちづくりに貢献すると考える。



## 通り道

3年 山口 和紀

本設計では敷地のもつ、21世紀公園と麓山公園への通り道としての役割を強く意識し、既存の動線の確保を行いつつ、住民の生活を彩るような空間を構築することを目指している。敷地の西側から南側にかけて沿道型の展示館を配置することで、麓山公園への動線の中に鑑賞体験を盛り込み、東側から南側にかけて資料館を配置することで、21世紀公園への動線に学習体験を盛り込んだ。また、それぞれの建物間に大小の庭を配置することで、空間全体を公園としてまとめた。二つの建物に囲まれた大きな庭は、敷地周辺に住む人々の生活を彩る空間となる。興味がある人もそうでない人も、通り道として日常的に利用する中で、建築や都市計画に自然と触れてほしいという思いから「通り道」というテーマを作品の軸とした。

## 研究発表

・山田義文, 「建築系高等教育機関における肢体不自由者の就学環境整備に関する研究—全国アンケート調査及び車いすを用いたケーススタディーに基づく実態検証—」, 日本建築学会地域施設設計画研究, Vol.38, pp.85-90, July 2020.

- 2020年度日本建築学会大会** 日時: 令和2年9月8~10日 会場: 千葉大学(千葉県) ※講演会等は中止
- ・セメントの種類及び粗骨材岩種がポーラスコンクリートの圧縮性状に及ぼす影響 ○武田昌也(日本大)・齋藤俊克・出村克宣
  - ・内装用サンドイッチパネルの火災安全性評価手法に関する研究 ○神田友輔(三菱ケミカル)・吉岡英樹・兼松学・Sanjay PAREEK・西尾悠平  
野口貴文・安藤達夫・田村政道・林吉彦・小林恭一・鍵屋浩司・早川哲哉  
○齋藤恭平(日建設計)・森山修治
  - ・火災時における階段室内の煙挙動の検証 その3 ○森山修治(日本大)・鍵屋浩司・出口嘉一・長谷見雄二
  - ・中小規模高齢者居住施設に適した火災時人命安全計画手法の開発研究 その2 火災初期の軽量吊戸の気密性に関する実験 ○森山修治(日本大)・森山修治
  - ・災害時要支援者が存在する施設の水平避難に関する研究 ○森山修治(日本大)・森山修治
  - ・いわき市を対象とした津波避難計画 ○印南衣梨(日本大)・森山修治
  - ・台風19号時の学生避難行動の実態に関する研究 日本大学工学部キャンパス周辺を対象に ○宮崎渉(日本大)・森山修治・浦部智義
  - ・東日本大震災後に福島県内に建設された復興交流施設の整備状況と運営実態に関する研究—被災12市町村を対象に—  
○仰木啓大(日本大)・浦部智義・宮崎渉・滑田崇志
  - ・郡山市民文化センターに関する住民調査研究—築年数が経つ公立文化施設に対する調査分析—その1—  
○飯村萌(日本大)・浦部智義・小松大輝・野口樹
  - ・白河市における歴史的風致形成建造物に関する調査研究—歴史まちづくりの現状把握— ○岡部真純(日本大)・市岡綾子
  - ・東日本大震災後の福島県における応急仮設住宅の再利用 再利用に関する部材別評価  
○清水裕貴(日本大)・浦部智義・滑田崇志・早川真介・渡部昌治・田中重夫・久保田悠人  
○山岸吉弘(日本大)  
○速水清孝(日本大)
  - ・福島県内における中世の大江
  - ・大船渡市の防火建築帯の指定について
  - ・指定管理者制度導入を想定した新たな漁港管理・運営の可能性に関する研究 ○永井勇輝(日本大)・山本和清・宮崎渉・鈴木一帆・加藤拓朗
  - ・発展途上国の組積造建築を対象とした滑り免震機構の開発に関する基礎的研究  
○多田麻也子(東京都立大)・高木次郎・荒木慶一・五十子幸樹・Sanjay PAREEK・李相勲・榊井健・鈴木裕介・榎田竜太・郭佳・福田伊織
  - ・バサルト繊維シート及びジオポリマーを用いた低環境負荷型木質複合部材の曲げ破壊挙動 その1 実験概要及び実験結果  
○鈴木裕介(大阪市立大)・西水真音・谷口与史也・荒木慶一・Sanjay PAREEK
  - ・バサルト繊維シート及びジオポリマーを用いた低環境負荷型木質複合部材の曲げ破壊挙動 その2 破壊モードの分析と曲げ剛性の評価  
○西水真音(銭高組)・鈴木裕介・谷口与史也・荒木慶一・Sanjay PAREEK

■浦部教授がキャンパス長を務める『かつらお復興キャンパス』の第3回大学連携会議が3月10日に開催された。

■海老澤健さん(浦部研卒)が, 3月29日に行われたJIA全国学生卒業設計コンクール2020 東北支部作品選考会で, 支部から全国への選出作品に選ばれた。

■浦部教授と浦部研究室が関わった, 福島アトラス05「避難12市町村の復興を考える基盤としての環境・歴史地図集—飯館村編」が3月31日に発刊された。

■速水教授と市岡専任講師は, 4月7日, 会津若松市より会津若松市庁舎整備設計業務委託プロポーザル選考委員会委員を委嘱され, 速水教授は委員長に選出された。

■市岡専任講師は, 4月20日, 会津若松市より会津若松駅前官民連携まちなか再生支援業務委託プロポーザル選考委員会委員を委嘱された。

■市岡専任講師は, 4月20日, 会津若松市より会津若松市立地適正化計画策定業務委託プロポーザル選考委員会委員を委嘱された。

■浦部教授と浦部研究室が計画・設計に関わった, 医療法人仁寿会菊池医院が6月6日にオープンした。

■市岡専任講師は, 6月25日, 郡山市より旧豊田貯水池利活用懇談会委員を再度委嘱された。

■市岡専任講師は, 6月29日, 環境省より令和2年度脱炭素・資源循環「まち・暮らし創生」FS委託業務に係る公募審査委員会委員を委嘱された。

■市岡専任講師は, 7月1日, 田村市より田村市都市計画審議会委員を再度委嘱された(浦部先生が会長に再選予定)。

■市岡専任講師は, 7月13日, 大熊町より大熊町教育施設整備事業基本設計・実施設計業務委託プロポーザル審査委員会委員を委嘱され, 副委員長に選出された。

■市岡専任講師は, 7月16日, 富岡町より富岡町共生型サポート拠点整備事業公募型プロポーザルに係る技術提案審査委員会を委嘱された。

■浦部教授と市岡専任講師は, 7月20日に「富岡駅前にごわいづくり検討委員会」委員(浦部教授は委員長)を委嘱された。

## 教室ニュース

■浦部教授は, 8月7日に「福島県住宅政策検討会議」並びに「高齢者居住検討部会」委員を委嘱された。

■市岡専任講師は, 8月7日, 須賀川市より須賀川市都市計画審議会委員を再度委嘱された。

■市岡専任講師は, 8月21日, 須賀川市より翠ヶ丘公園温浴施設等整備事業者選定委員会委員を委嘱され委員長に選出された。

■市岡専任講師は, 8月28日, 須賀川市より須賀川市文化財保護審議会委員を再度委嘱された。

■市岡専任講師は, 9月15日, 国土交通省東北地方整備局より福島県復興祈念公園整備・管理運営検討委員会委員を委嘱された。

■岡部真純さん(市岡研・M2)は, 9月21日, 令和2年度日本造園学会東北支部大会ポスターセッションにて, 優秀学生賞を受賞し表彰された。

■浦部教授と山岸専任講師も執筆した, 日本建築学会編, 「建築設計のためのプログラム事典—名設計の本質エッセンスを探る」が10月1日に鹿島出版会から発刊した。

■市岡専任講師は, 10月1日, 福島県より福島県景観アドバイザーを再度委嘱された。

■浦部先生は, 10月8日に郡山市緑の基本計画策定懇談会の委員を委嘱された。

■市岡専任講師は, 10月22日, 双葉町より双葉町学校等施設在り方検討委員会委員を委嘱された。

■市岡専任講師は, 10月24日, 3.11伝承ロード推進機構主催の防災・伝承セミナー(web中継)に, パネルディスカッションのパネリストとして登壇された。

■浦部先生は, 10月24日に行われた第7回サステナブル地域づくりフォーラムにおいて, 「健康で行こうよ!—医・食×空間をまちづくり—」と題して講演した。

■和久井亘さん(浦部研・B4)が, 第5回賞学生アイデアコンペティションにおいて, 作品名「KAWARA BLIND」で佳作に入選した。

■浦部教授と浦部研究室が, 『復興交流館「あざりあ」の計画・設計・運営に関わる一連の活動』で2020年度グッドデザイン賞を受賞した。

■浦部先生と宮崎先生が監修した, 「福島県産材活用優良事例集」が福島県木材協同組合連合会から発刊された。

■和久井亘さん(浦部研・B4)が, 第24回東北建築学生賞において, 作品名「まちなかの縁台に腰かけて」で最優秀賞を受賞した。